

渋沢栄一と関東大震災

第一章 震災第一日 兜町における被災と脱出

補説一 第一銀行・日本銀行の防災および防衛

―地震発生の当夜から翌朝へ―

第二章 震災第二日 飛鳥山における避難と救援

第三章 震災第三日 危機管理の提起

第四章 震災第五日 救済政策と復興事業への参与

第一章 震災第一日 兜町における被災と脱出

日本における資本主義の父とも讃えられる渋沢栄一は、一九三三年（大正二二年）九月一日午前十一時五十八分、日本橋兜町で大地震に襲われた。一九〇七年に六九の企業・団体から、また一九一六年第一銀行など金融機関からも身を退いた彼は、なお社会事業の推進に専念しつつ兜町事務所において執務中であった。照明や瓦は落下したが、堅固な西洋館は激震に耐え、秘書に支えられて戸外へ脱出する。①翌々月に刊行された東京銀行集会所の機関誌『銀行通信録』に渋沢は自己の被災証言を寄稿した。

渋沢栄一「大震災の追想と所感一二」その一

兜町で丁度書類を調べて居って、俄に揺れ出したに付て同じ事務所に出て居る若い人に助けられて室外に出ましたけれども、唯々見て居る前に壁が大変振はれたり、中には煉瓦が落ちたり、屋根が大分壊れたよう

① 白石喜太郎著『渋沢栄一翁』刀江書院、一九三三年。九〇六頁。（白石喜太郎著『渋沢栄一翁 九二年の生涯』国書刊行会二〇二二年。冬の巻、七五頁。）

白石喜太郎による評伝については一九三三刀江書院版へ基本的に依拠するが、国書刊行会の現代文テキスト版を適宜参照する。

に見えたから、困ったものだと思いましたけれども、焼けると云う考は些かとも持たなかった。

併し唯々残念なのは明治二十一年頃建築したので、死んだ辰野金吾と云う人の御手見せの建物で、小さい建物ではあるけれども私の身体から言っても辰野の技術から言っても、一種の歴史的の建物で、既に此春であつたか、小さい食事の時に今の大蔵大臣の井上君が度々私は此処へ来て御馳走などになったり、寄合に合わつたりするが、未だ此建物を能く見なかった、併し今日は染み染み見た、良い家だ、贅沢の善請だと申しますから、贅沢でも無いではないが、今の建築から見ると、甚だ見窄らしいと申したら、そうでない、五階の煉瓦造とは大変違う。斯う云う家は壊さないやうにして貰ひたいものだ、好い見本になるなど言うて、頻りに褒めたりして居った。客間の天井に変わった絵の切込んだのがあつたり、或いは側に川があるものですから、『ヴェニス』に柱を建てたり、総てそんなものが一層珍重された。①

兜町事務所の震撼を伝える他の証言は、栄一の四男洪沢秀雄の聞き書きである。のちに彼はむしろ文筆家として世に知られるが、父親を創立者とする田園都市株式会社取締役を務め、おりしも軽井沢へ出張中であつた。

① 洪沢栄一「大震災の追想と所感二」『銀行通信録』第七六卷第四五五号（大正十二年十一月）。

『洪沢栄一伝記資料』第五十一卷、二四―二五頁。

〔参照〕白石喜太郎著『洪沢栄一翁』、八〇七頁。（『洪沢栄一翁 九二年の生涯』冬の巻、七六頁。）

大正十二年九月一日の昼に大地震が突発した。兜町の古い事務所で秘書の増田明六と用談中だつた栄一の服は、天井や壁から落ち散る漆喰のため真っ白になり、部屋全体が波のように揺れに揺れた。

太りじしの八十四翁に敏活な動作はできない。増田が栄一を導いてやつと戸口まで辿りついたときに第二の激震がおこり、マントルピースの上に張られた大鏡は顛落し、天井中央のシャンデリヤも落下して、一大音響と共にガラスの破片を炸裂させた。二、三步おくれれば、そのどちらかに打たれた筈である。そこへ事務員の井田善之助も駆けつけてきた。二人は身をもって老翁をかばいながら玄関前へ逃れ出た。

そうした栄一の眼前で、ヴェネチャン・ゴチックの洋館は見る見る壁をふるい落とし、柱を傾けさせてムザンな姿に変わっていった。しかも後刻付近一帯におこつた火の手で一ト呑みにされてしまった。そこには編纂中の徳川慶喜伝資料が保管してあつた。①

日本橋の橋畔、兜町は明治維新のち金融の中心として開発され、一八七一年に第一国立銀行が、一八七八年には東京株式取引所がそこに設立された。東京駅や帝国ホテルを造営した著名な建築家辰野金吾が、洪沢栄一のためそこに西洋館を建てたのである。その邸宅は日本橋川の河畔にあつて、瀟洒な二階テラスからは日本橋や河岸も展望でき、その眺めはあたかもヴェネチアのリアルト橋をも連想させる。栄一の証言のなかで、この住まいを称讚した「井上君」とは、かつて日本銀行総裁を務め、震災直後大蔵大臣に就任し、一九三二年に暗殺され

① 洪沢秀雄著『父洪沢栄一』実業之日本社、一九五九年。下巻、一八一―一八二頁。

る井上準之助にほかならぬ。門弟が編纂した『青淵先生六十年史』から渋谷邸についての記述を参照する。

兜町邸は明治十九年十二月工を起シ建築スル所ニシテ工学博士辰野金吾の設計ニヨリ模範を伊太利ベニスノ家屋ニ取タルモノナリト云フ。本邸ハ市中最モ熱鬧ノ中央二位シ川ニ臨ミ西洋風ニ建築セルモノニシテ舞踊室ヲモソナヘタリ。蓋シ明治十九年頃我實際社会ヲ文明風ニ誘導改良セサルヘカラストノ說朝野有志者ノ間ニ起リタルトキ當時実業社会の人ノ多クハ公ケノ交際ト云フ意味ヲ解セス之レハ御役人ノ務ニシテ自分等の関知スヘキ所ニアラストノ觀念アリシヲ以テ先生ハ率先例ヲ開クノ考ニアリシト云エリ或人嘗テ謂ヘルコトアリ商業上国家的ト言フ先生ノ議論ハ々聴キタルカ王子邸ト云ヒ兜町邸ト云ヒ家ヲ造ルニツイテモ亦国家的ノ觀念アリト以テ先生平生ノ志ノ存スル所知ルヘキナリ ①

つとに明治十六年ヨーロッパ留学の直後、辰野金吾は日本橋坂本町に位置する東京銀行集会所の設計を渋谷から相談され、依頼者の胸中に豪壮な都市計画が宿ることに感嘆した。「日本橋から東京湾に向う兜町、南茅場町、坂本町の三町を、運河を活かしたベニスのように変えることである。この地区に、彼は自らが設立した会社、金融機関や会議所、集会所を置き、ついにはイタリア風デザインの自邸まで」建てた。建築に関する渋谷との会話

① 『青淵先生六十年史』龍門社、一九〇〇年。第二卷、九一三頁。

が辰野には楽しみであったと言う。①

一九七八年王子飛鳥山に自邸が建設されて、以後兜町の建物は事務所に転用され、渋谷家系の同族会もそこで毎週行われた。「渋谷事務所は、」とかつての秘書白石喜太郎は説明する。「あるときは実業界における種々の事象の発源地であり、あるときは公共事業の誕生所であった。翁の関係するところが広汎なだけに、渋谷事務所の関係するところもまた極めて雑多であった。この広き範囲にわたる多種多様な関係を処理するとともに、資金の運用管理をもつかさどった。翁が実業界の人として活躍した間は、みずからその運用管理に任じた。」② 地震発生の数年前、飛鳥山から兜町へ通勤する彼の日常も、雑誌『実業之日本』でつぎのように紹介される。

男爵渋谷栄一は当年とって七十六歳の高齢を以て、意気壯者を凌ぎ、日々奮闘、平均十五時間に涉るとは驚くではないか。此寒空に男爵は毎日六時には早くも床を離れて入浴し、其日の奮闘準備に掛るのが常だ。午前七時からモウ客が飛鳥山本邸に続々詰め掛け、中には我こそ天晴先登第一の名譽を荷はんものと、開門前より押し寄せ、門の開くや否や飛び込む大熱心家も居る。午前十時頃まで、日々少なくとも七八人の客が引切りなしに尋ねて来るので、どうかすると男爵は朝飯を喰いはぐれることが度々あるそうだ。

午前十時頃になると話を切り上げて、三十二号の銘を打ったる自動車に乗って警笛勇ましく本邸を出て、

① 東秀紀著『東京駅の建築家辰野金吾伝』講談社、二〇〇二年。二二三―二三四頁。

② 白石喜太郎著『渋谷栄一翁』、六六一―六六二頁。(『渋谷栄一翁 九二年の生涯』秋の巻、二一六頁。)

途中三、四軒の約束先を順次訪問し、それから目下男爵の唯一の実業的事業たる第一に立ち寄り、そこで重役と食卓を同うし、行務を打ち合わせながら昼食を取ると言う寸法になっている。

かくて兜町の事務所に、福徳円満のニコニコ顔を現すのが、たいがい午後一時半頃である。そこにはすでに数多の客が詰めかけて、男爵の米所を今や遅しと鶴首している。後から後からと引っ切りなしに来る客が、日々どうしても二十名以上あるそうだ。親切な男爵は多くは客を引見し、そして噛んで含めるような反復丁寧な談話振り、玄関に客を送り出でてなおねんごろでつきない。そのなかに諸方から電話が引っ切りなしにかかってくる。四時頃になると、モウ約束の時間がきて、またもや外出。毎晩止むを得ざる会が少なくとも二ヶ所はある。それを済まし、ようやくその日の活動を終わって飛鳥山の本邸へ帰るのが、たいがい午後十時頃である。それから朝見残したその日の新聞紙や、諸方から寄贈してきた諸雑誌を繕読して、ようやく午後十二時ころ床に就くのが例だ。

さて兜町の本陣における男爵の机の据えてある所というのは、二十畳敷くらい西洋間で、応接兼用になっている。ズツと室に入ると、向かつて左には一双の屏風が列べられ、正面には暖かそうに燃やされたストーブが据えられ、その脇に男爵の机と応接用のテーブルとが左右に置かれ、そのテーブルを囲って五、六脚の皮張り椅子が列べられている。〔中略〕

男爵の机上に諸方から日々降ってくる手紙は本邸約十本、兜町事務所均し三十本、合計約四十本位なそうだ。そのなかで一番多いのは、男爵の今も関係しておられる慈善および教育に関することである。金を貸してくれとか、寄付して欲しいとか、職業を世話してもらいたいといったような無心状が、日に三、四本ずつ

くる。そしてそれが一面識もない知らぬ人からのだから驚く……。

①

兜町事務所は激震にも持ち堪えたものの、相当に破壊されてやはり危険であり、まもなく至近の距離、第一銀行の建物へ避難する。この金融機関は渋沢栄一その人によって一八七三年創立された日本最初の銀行であって、海運橋の袂に建てられた和洋折衷の高楼が世の関心を惹き、歌川芳虎や小林清親の浮世絵にも描かれる。地震発生のとき避難したのは、一九〇二年辰野金吾の設計により改築された堅固な西洋建築である。『銀行通信録』に寄せられた渋沢の証言をふたたび参照したい。

渋沢栄一「大震災の追想と所感一二」その二

夫れで其日は今言ふひどい震動の為に、外へ出て嘆息して時々壁が振れるのを見て居りましたけれども、別に仕様がな、其処へ第一銀行の方から、此方は揺れるけれども銀行の方は決して潰れるやうな心配はない、此方へお出でなすつたら宜かろうと云うて呉れたから、其処へ行つて午食に「パン」など食べて、少し休息して居った。其中に一応王子の方へ帰りたいと思うたが途中街路は地震及火災の避難者で充満した場所もあるので、通り筋を一応確かめた上先ず丸の内から須田町に出て、明神坂から本郷三丁目を切通しへ出て

上野へ這入り根津から動坂を登って、此処（王子の子爵邸）へ帰って来ました。かれこれ四時頃でもありませんが、其時まで如此大火災になろうとは少しも思わなかった。

尤も銀行に居たとき、火災が二、三箇所始まったやうだが、震災後の火災は怖いものだと言ふことに、私は氣付はしたけれども、傍らに居る人が此処が焼けるやうなことはどうしたってあるう筈はないと言ふから、私の方の事務所は逆も用になるまい、大分破れたから修繕がどうだろうか、何れ地震が止んだら後で始末して見なければならぬと思うが、事に依ると彼処で事務が執れぬと思ふたので銀行から一室借受けて必要書類だけ此方へ移させることにして私は帰る。途中が心配だから送って上げませうと云われたので、其氣に為って増田に送られて家へ帰ってきた。為に火災の注意を些とせんで、何ともないと思つたのが、翌朝聞けば皆焼けてしまった。なんたる遺憾であつたか、なんたる不注意であつたか。①

一八七三年日本最初の銀行、第一国立銀行が日本橋兜町において創立された。「明治六年六月十一日 栄一創立會ニ出席シ、銀行營業方法、三井小野兩組ヨリ役員撰出ノ件、總監役ヲ設クル件ノ三案ヲ提議シ、且ツ自ら

① 洪沢栄一「大震災の追想と所感一二」。『銀行通信録』第七六卷第四五号『洪沢栄一伝記資料』第五一巻、

二五―二六頁。

〔参照〕白石喜太郎著『洪沢栄一翁』、八〇八―八〇九頁。（『洪沢栄一翁 九二年の生涯』冬の巻、七七―七八頁。）

草案セル申合せ規則及同増補ヲ一読シテ衆ニ詢リ株主ノ贊同ヲ受ク。席上取締役ニ推薦セラレシモ尚官職にアルヲ以テ辞シ、翌十二日總監役就任ニ関スル契約ヲ締結ス。」① 維新以前の金融機関としては、兩替商、蔵元、札差等しがなく、機械制大工業や大規模な商業に対応できぬ規模であつた。第一国立銀行、一八九六年の改名による第一銀行について、創立の意義と経緯が白石喜太郎の評伝『洪沢栄一翁』で詳しく述べられる。

第一銀行は翁の実業界へのスタートとして、また第一銀行は翁の実業界における光輝に充てる活躍の総本部として、忘るべからざるものである。翁が洋々たる前途を有する官場生活と綺麗さっぱり絶縁し、ほとんどまったく新しき経験とも言うべき商工業界の人として働くことになり、先輩と言わず友人と言わず、知る限りの人をして啞然たらしめたこの飛躍をなすに至つたことはすでに記した。

当時の翁の期するところは、論語を信条として商工業を営み、もつて商工業者の地位を向上せしめ、官尊民卑の弊風打破を実現せんとするのであつた。すなわち条理による商工業経営の実現が目標であつた。而してこの理想実現のため選んだのは第一国立銀行の設立であつた。この点だけでも第一国立銀行は、翁を考ふる時第一に挙げねばならぬものである。しかも半世紀にわたつて常に翁の活動の中心であつたことを考へるとき、その感が一層深いのである。

第一国立銀行は翁が苦心立案せる国立銀行条例によつて生まれたものである。銀行条例は理想に近いきわ

めて新しい実業機関に関する成規であった。ゆえにこれを理解するもの少く、たとえ理解する者があっても、これを実現せる力あるものは稀であった。当時国立銀行を設立し、もしくは設立に参加し得べしと認められたもののは、三井、小野、島田の三組であった。子爵はこれに着眼し、協同経営をしょうけい慫慂した。しかし、島田組はいくばもなくその力を失ったため、三井、小野の提携勸説に力を用いたのである。①

地震発生の時点における第一銀行については大著『第一銀行史』に銀行員吉岡義治の証言が見出される。吉岡はコンクリート建四階で最初の震動に襲われ、すぐさま辰野金吾設計の旧館営業部へ戻った。七年前に洪沢が引退し、このとき頭取の地位を佐々木勇之助があり、三女愛子の婿、明石照男は本店支配人を務めていた。

震災当日宿直して本店が灰燼に帰し去った様子をつぶさに体験した吉岡義二の手記（昭和二年十一月『龍門雜誌』をみよう。

「自分は丁度その時コンクリート建の四階の大食堂で将に食事しようとしていた。始め嵐の近づくやうな音を耳にしたと思ふ瞬間、床下を何ものが大鉄槌でなぐり付けるような激動を感じた。咄嗟に地震とは思ひつかなかった。激しい上下動だ！と思ふ間もなく天井が崩れて来そうに見えた。鉄鎖で釣った照明燈ぶらんこのように天井を往復して今にも離れさうだ。遙かな地平線が窓框のなかを上下している。今にこの五層

① 白石喜太郎著『洪沢栄一翁』、二四五―一四六頁。（『洪沢栄一翁 九二年の生涯』頁。）

樓が横倒しに河に墜ちて居並ぶ人々と共死するのかと観念した。」

やがて吉岡は職場に戻ろうとして本館へ帰っていったのである。（中略）

「薄暗い本館の室へ勇を鼓して入って見ると、平常百人居る営業所に人影は稀れで、唯大切な場所に数人の人々が不安そうに残って居た。自分の方の席に主任の酒井さんが下を向いたまま緊張した顔で手紙を書いて居る。ひどい砂埃の中に座って頭上の大天井が気味悪く揺ぐのも顧みずその日の事務を執り続けている。」

そのとき第二震が来た。「寺院の天井のやうに高い営業室全体が凄まじい家鳴りをたてて響きわたり、三丈余の大円柱がは波うって今にも倒れそうであった。

「この時、室の中央の支配人席に立って居た日頃温厚な支配人が毅然として（この地震では何処へ逃げて同じ事だ。この職席を離れずに居よう。ここで最後となるもそれまでの覚悟だ。）と同僚の人々を励まして動かなかった。

支配人は明石照男であった。吉岡は「思えばあの古い石造の大建築が崩れなかったのは幸いであった」と言っている。すでに明治三十五年から二十数年経っていて古色は覆うべくもなかったが、石造ゆえに火災に罹るとは思わなかった。

この夜吉岡は宿直の補充となって早川政次と共に本店に夜を明かすことになった。①

一八七三年海運橋の袂に創立された第一国立銀行の建物は、清水喜助の設計で三井組により造営された。伝統的な土蔵造りを基本とし、和洋折衷の豪華なその建築は、文明開化の名所として歌川芳虎や小林清親の浮世絵にも描かれる。その後一八九六年条例改正に伴って第一銀行と名称を変更し、一九〇二年約三倍の面積に改築された。① この時期に編纂された『龍門雜誌』には、こうした建造と落成の様子が詳しく記録される。

○第一銀行の新築工事

第一銀行は明治六年第一国立銀行創立の際より、廿余年間青淵先生の統理の下にありて、拮据経営以て国立銀行の模範たることを期し、営業の基礎益鞏固となり、其区域拡張せられ、明治廿九年九月廿五日国立銀行の営業満期となるべきを以て、更に資本金を四百五十万円に増加し、私立銀行として営業を継続することとなりしを以て、此際本支店の建築にして改築を要するものは、漸次其工事に着手するの議、重役の間に起り、遂に卅年一月廿五日営業継続後、第一回株主総会に於て、本店家屋改築の爲め毎季其積立金を設くべく、而して其構造は事務所総坪数大略三百三十余坪金庫三十二坪、外に附属家屋等若干にして、其費用は大約十五万円以上式拾万円許の予定なれども、当時其製図設計中なるを以て、他日予算を確定して更に報告すべき旨を告げ、且つ同季より其積立金を為すべきことを議し、同期利益金の中より式万円を新築費積立金となし、其後毎半季必らず同額の積立金をなせり、之と同時に仁川支店名古屋支店をも改築するの議起り、本

① 『第一銀行史』上巻、二七一一―二七三、九二七―九三二頁。

店改築の序を以て其工事に着手すること、せり、

建築の設計は日本銀行其他の建築物の設計者として監督者として工学社会に有名なる工学博士辰野金吾氏に委托したり、同氏は工学士石井敬吉氏を補助となし、工学士新家孝正氏を工事監督となし、工学士森山松之助氏、建築師中尾光次郎、日高尚忠氏等を招致して、製図及び工事に着手せしむること、なせり、銀行に於ては主として本店支配人佐々木勇之助氏、周密にして敏慧なる注意を以て、其監督の任に当られたり、

本店の位地、殆かも世界の金融市場の中心たる倫敦に於けるロンバードストリートの如く、将来に於て東洋市場の中心たるべき東京の最中心——銀行取引所其他の金融機関か軒を並へて其営業を競へる日本橋区兜町に於て——而かも銀行建築の最良条件とも云ふべき四隣街衢に接したる、即ち出入に最も便利なる地位を占むるものなり、此好位地に於て、辰野工学博士の細密にして豊富なる意匠を以て Renaissance Style 復興式に則りて其設計を為し、外観の美を銜んよりも寧ろ建築の堅牢を旨とし、佐々木支配人の親切にして周到なる注意を以て、接客と執務の便利を主とし監督せらるることなれば、実に私立銀行の模範建築と云ふも不可なきなり、

明治三十一年五月を以て旧営業所の後方兜町式番地に建設せる仮営業所に移転し、直に旧営業所を取毀ち、九月に至り残材を悉く取除き、同月より新築工事に着手せり、

建築は前後の二部に分け、前部は営業場にして後部には重役室支配人室其他の事務室応接室食堂を設け、其上層を会議室となせり、其他地中室を設けたり、最も光線と換気とに注意を加へ、外壁は石造にして内壁には鉄条を縦横に交叉し、床は新式の耐火床を張り、震災火災等の危険を防ぎ、暖房機、消火機、電灯其他内部の設備微細の粧飾に至るまで、質素を旨とし実用を主として計画をなせり、

目下基礎工事に着手中にして、日々數十人の人夫を役して松材を打ち込みて地盤固めをなし、一方に於て蒸気機を用ひてコンクリートを製造せり、河岸に仮橋を架設して建築用材の揚卸をなし、深川大工町の作事場と水上にて往来せり、

工程尚初期にあれども、明後年の末に到りて落成せるものとせば第一銀行は二十世紀の劈頭に於て巍然として海運橋畔に大觀を現すへし

①

○第一銀行新築披露会景況

第一銀行新築建物は去三月卅一日落成したるを以て四月三日午前九時より午後四時迄府下の紳士紳商等を招きて屋内を觀覽に供し新築の披露を為したるが、來觀者は蜂須賀侯爵、鍋嶋侯爵、三井男爵、三井守之助、三井養之助、大倉喜八郎、淺野総一郎、原六郎、馬越恭平、今村清之助、園田孝吉、田口卯吉氏等を始めとし無慮一千余名にして、頭取たる青淵先生を始め佐々木支配人以下入口に於て一々來觀者を迎へ当日の紀念品たる白扇及紙扶を交付し、続て行員の先導にて先づ營業場を始め各室を鄭寧に案内し詳細なる説明をなし、階上の広間には接待場を設け立食茶菓の饗応ありて、觀覽を終りたる者は順次後の入口より夫々退散したり、尚ほ当日午前八時今回同行中庭に建設したる青淵先生の銅像除幕式を挙行し、先づ佐々木支配人の祝詞あり、続て同先生の答辭、及行員一同に対する懇篤なる訓戒の演説ありたりと云ふ

① 『龍門雜誌』第一三二号〔明治三二年五月〕『渋沢栄一伝記資料』第四卷、六〇七―六〇八頁。

○新築第一銀行の構造及設備

第一銀行本店新築建物は地を日本橋区兜町一番地に卜し、去明治三十一年九月十五日に之が起工を為し、頭取たる青淵先生の素志に基き其設計並に構造等は専ら堅牢なるを旨とし華美の裝飾は努めて之を避け支配人佐々木勇之助氏之が指揮を為し、工学博士辰野金吾氏の設計に基き工学士新家孝正氏工事監督の任に當り、暖房工事は工学博士坂田貞一氏、電気工事は工学博士玉木升太郎氏担任して、爾來約三ヶ年半の星霜を経、遂に今三十五年三月三十一日を以て全くに其工事全部の落成を告げ、愈々去四月六日此に移転し、明七日より此新築家屋に於て營業を開始せり、今其構造及設備の概略を記載すれば左の如し

建築紀要

地坪	八百七十三坪八合二勺五才
建坪	四百七十二坪六合
本館	外法四百一坪四合
營業室	二百七坪八合
重役室及各室	百六十二坪五合
金庫	三十一坪一合
附屬家七十一坪二合	

構造 石造にして石材は花崗石白丁場石を用ひ、壁真に鉄棒鉄条を積込み、各室の床は鉄骨耐火構造にして、入口及窓には英式のシャッターを用ひ、屋根は防火の爲めアスベストスミルボードを用ひ、銅板及スレート

を以て葺立て、屋上に避雷針を設け、各室に暖房器を備へ、地下室に発電機並に蓄電池を置き、電灯及金庫内換気の用に供し、三階に至る迄非常消火栓を設け、耐火防火等の設備には最も周到なる注意を用ひ、完全を期したり

基礎 コンクリート厚さ五尺其底面地盤線より十五尺なり

①

住民数十万の運命を揺るがし、洪沢の生活と環境をも激変させた大正十二年九月一日について、白石は以下のとおり手帳に誌す。「午前十一時五十八分大地震発ル、震動ノ為メ洪沢事務所大破、惨憺タリ、折柄事務所ニアリシ子爵及栄一及増田以下全員無事、一同第一銀行ニ避難、子爵ハ同行旧館ニ於テ、頭取・石井・杉田・西条諸氏ト談話小憩ノ上、午後二時三十分頃明石氏ノ自動車ニテ（子爵乗用七七号車ハ事務所正門附近煉瓦・石材其他山積シタル為メ運出シ不能トナリタル為メ）根津ニ大迂廻シテ帰邸セラル、増田氏同伴、円庭ノ仮小屋ニテ就眠セラル」② こうして洪沢栄一は兜町事務所での被災から脱出し、夕宵飛鳥山邸宅へ無事帰還した。

① 『龍門雜誌』第一六七号（明治三五年四月）、三二―三四頁。『洪沢栄一伝記資料』第四卷、六〇五―六〇六頁。

② 「白石喜太郎手記」『洪沢栄一伝記資料』第五〇卷、一九六一―一九七頁。